

[原 著]

図書館情報（リテラシー）教育におけるスポーツ学部学生の利用に伴う 動向について その3 ～継続的利用に伴う情報スキルの定着について

堀内 担志¹⁾, 矢崎 美香²⁾

The trend of the library use by the student's faculty of sports science after receiving the library literacy education (Part 3) ; About the acquirement of the information skill with the continuous use

Tanji HORIUCHI¹⁾ and Mika YAZAKI²⁾

Abstract

Kyushu Kyoritsu University established the faculty of Sports Science in 2006. The faculty of Sports Science has introduced library information education for freshmen into its curriculum since its establishment. We analyzed the effect of library information education for the students in the faculty on them; Horiuchi and Yazaki (2008) and (2009). In this paper we studies how the students, who are senior in particular, acquire information skill about the use of library by analyzing the learning trend of them and the results of questionnaire for them.

KEY WORDS : literacy education, information education, library literacy

1. はじめに

スポーツ学部設置から4年が経過した。そこで4年間継続的に行った図書館情報（リテラシー）教育の結果が学生の学習傾向にどのような効果をもたらしたか、また学生の学習及び図書館の利用についてどのような動向をみせたかが見えてきた。

元々この動向調査についての始まりは昨年、一昨年発表した紀要でも述べているが、スポーツ学部が大きな柱として掲げているスポーツを通した全人教育と心の教育の中で「社会組織の中でどう自分が動くのか」、「人をどう動かしまとめるのか」といったコミュニケーション能力の向上からであった。

また大学に通うことによる様々な問題意識を持ち、

社会人としての資質を研ぎ、社会の中におけるスポーツの意義と生かし方を学び、深い洞察力と知識を身につけることを目標として図書館情報（リテラシー）教育を行ったことがきっかけである。¹⁾²⁾

そのきっかけをもとに図書館情報（リテラシー）教育を始めたが、継続的に学年が上がるにつれて見えてくる学習傾向は興味深いものである。

2. 目的

今回も昨年発表した紀要同様「図書館情報（リテラシー）教育におけるスポーツ学部学生の利用に伴う動向について」をもとに、スポーツ学部の新入学生および各学年の学生を対象に図書館情報教育の学習効果お

1) 九州共立大学スポーツ学部

2) 九州女子大学・九州女子短期大学附属図書館

1) Kyushu Kyoritsu University Faculty of Sports Science

2) Kyushu Women's University & Kyushu Women's Junior College Library

よび図書館利用動向の調査を行うこととした。

新入学生から4年生までのそれぞれの図書館情報（リテラシー）教育は、学生にとってどのような効果を見せてきたか、また4年間継続的に行ってきた効果はある一定の傾向を示すのではないかとみている。

特に最終学年の4年生が新入学生の時に受けた「図書館情報（リテラシー）教育」、3年・4年で受けた「図書館活用」など学年が経るにつれて習得した図書館における情報スキルの講義がどのような効果を見せているかを目的とした。

これらを踏まえ、スポーツ学部の情報（リテラシー）教育と図書館がどのようなかかわりを持ち、連携した協力体制で学生の学習援助を行っていくかの指針を出すことを目的とした。

3. 実施内容の説明

学部と連携した図書館情報（リテラシー）教育は4年目を迎え正式に学部の講義の一部として組み込まれ実施している。

例年、スポーツ学部1年生全員は「人間基礎演習」の講義時間1コマを「図書館情報（リテラシー）教育」の時間として提供してもらい4月～6月にかけて新入学生ゼミ（Step0）を行っている。講義の内容としては表1のとおりであり、前述の紀要に載せているためここでは詳細な説明は省く。

【Step0】	新入生を対象に図書館の利用方法および館内案内、図書所蔵検索、事項検索。
【Step1】	新入生（大学1～2年生）を対象に基本的な図書館の使い方及びパソコン操作の習得。
【Step2】	「Step1」で習得した図書館利用のスキルを大学3～4年、大学院生でさらに向上させ、より迅速に情報収集が行えるようにパソコン操作ができ、情報の取捨選択ができるスキルを習得させる。
【Step3】	教員との連携により講義時間に図書館の利用方法及び総合活用を個別に教育的サポートする。あわせて図書館員が講義の補助として教員をもサポートする。
【Step4】	学習・研究目的とは違う図書館活用の学生に対してのニーズをその都度探りそのための支援を行う。

（表1）Step別講義内容項目表

その後のスポーツ学部2～4年生においては、1年生の図書館情報（リテラシー）教育ののち2年生においては特に「図書館情報（リテラシー）教育」は行っていないが、教科の担当教員の意向のもとに新入学生時の内容を復習する形での（Step1,2）を行っている。

3年生になった際には「スポーツ学演習Ⅰ,Ⅱ」の講義が「図書館活用」（Step3）の講義として担当教員の申し込みで行われている。その学生は4年生になった時点で担当教員は変わらず「卒論研究」というゼミになる。そこでまた「図書館活用」（Step4）を講義として組み込んでもらい情報スキルの定着を見ている。しかし、あくまでも「図書館活用」（Step3,4）は担当教員の協力のもとで行っているためスポーツ学部学生の3,4年生全員が受講しているとは限らない。

なお、「Step3」の講義内容は、蔵書検索はもちろんのこと本学図書館の資料全般からの資料収集を目的としている。3年生の間に卒論に向けての題目決定のために参考となる文献収集スキルを習得させる内容である。「Step4」は「Step3」を受けた学生が論文を書くための文献収集スキルを身につけるためデータベースの使い方や参考文献の使い方、情報精査の方法など論文作成に伴うスキルを担当教員との連携体制のもとに行い、様々な形態の資料収集や取得方法をレクチャーした。

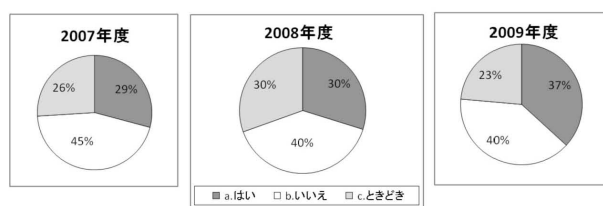
この「Step0」～「Step4」を行うことによりスポーツ学部学生の図書館利用動向、学習傾向の変化をアンケート及び図書館の利用実態からみることにした。

なおアンケートの実施は、新入学生の「図書館情報（リテラシー）教育」（Step0）直後と今回新たに学年の終わりに近づいた12月に全学年にむけアンケート調査を行った。その結果、アンケートの意識調査からは受講後すぐにあらわれてくる数字とは違い講義後実際図書館を利用した後の数字がでたため、より学生の利用及び学習傾向が見えてくることとなった。

4. 図書館利用の傾向

4-1) 高校生時の図書館利用傾向

新入学生における「図書館情報（リテラシー）教育」の後すぐに図書館利用についてアンケート行っている。それは、高校生の時の図書館の利用実態と大学生になり図書館の認知度および利用傾向を把握するためである。



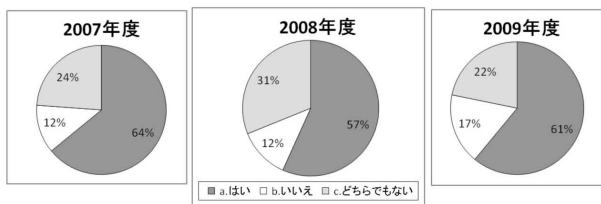
（図1）高校生の時に図書館(室)を利用していましたか？

例年この意識調査を行っているが、過去3年間を振り返ってみると図1の「高校生の時に図書室を利用していましたか？」については「はい」、「ときどき」を含め55～60%のという回答であった。その反面「いいえ」の数字も40～45%と利用していない学生がいることが分かった。

4-2) 「図書館情報（リテラシー）教育」受講後の利用傾向について

「図書館情報（リテラシー）教育」後、新入学生が今後図書館を利用しようと思うか思わないかの利用傾向のアンケートを行った。

この結果は、初年度に学生の唯一の学習の場である図書館を使う意思があるかないかにより教員の学生に対しての教育または学習傾向の促し方がかわる。あわせて図書館としても利用を促進するような働きかけを行わないといけないため、そのアプローチの方法を検討する要因となる。



(図2) 新入生ゼミを聞いて図書館を利用しようと思いましたか？

図2はその数字を顕著に示し、「図書館情報（リテラシー）教育」後は「はい」、「ときどき」を含め83～88%の学生が利用しようと考えていることがわかる。学生の学習意欲が高まった時により効果的な学習体系を作ることが望ましいのではないかと考える。

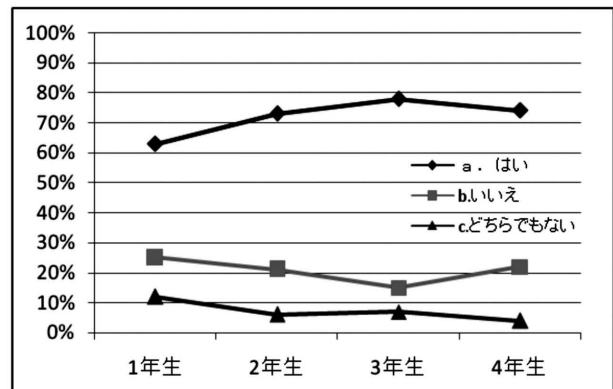
5. 検索について変化

5-1) 蔵書検索について

例年講義中の課題（検索）に要する時間の変化を見てきたが、例年大差はない。ただし高校生の時に情報教育を受講していた学生や昨今の社会状況からパソコン操作等についてのスキルに手間取ることなく操作できることは如実に表れている。

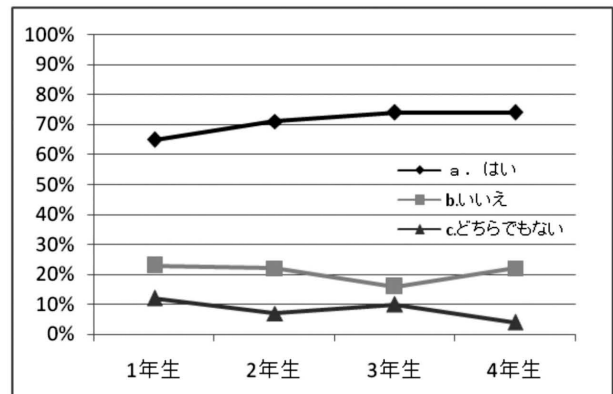
そこで今回は蔵書検索がどの程度定着しているのかをみることにした。アンケートの結果受講後半月以上経過しているにも関わらずかなりの学生が図3のとおり「蔵書検索はできますか」という質問に対し60%以

上が「はい」と回答している。

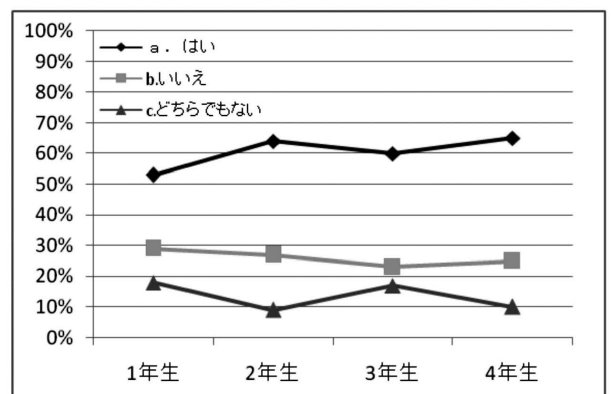


(図3) 蔵書検索はできますか？

また図4の「検索結果の見方は理解していますか？」及び図5「検索結果の記述はできますか？」という質問に対しても60%近い学生が「はい」と回答している。



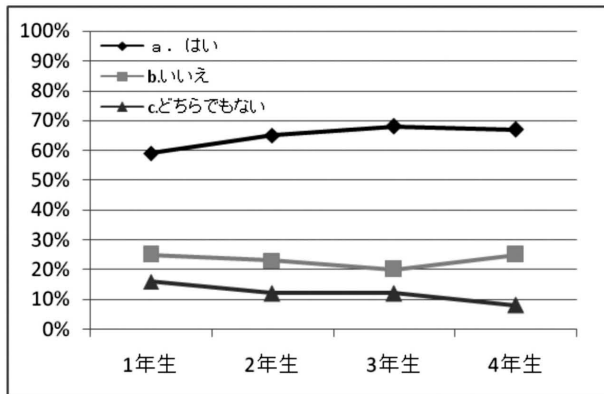
(図4) 検索結果の見方は理解していますか？



(図5) 検索結果の記述はできますか？

検索を行うことはかなりの学生に定着しているが、実際に資料を探せるか図6「検索結果から資料（図

書・雑誌・視聴覚）等を探せますか？」という質問をすると60%以上の学生が「はい」と回答した。ここで重要なのは検索を行いその結果を記述して資料を探しに行く流れを理解していることがわかる。その傾向はわずかながらでも4年生になるにつれ「はい」の回答率が上がってきていることは、図書館の資料検索を何度も行い利用していることがわかる。

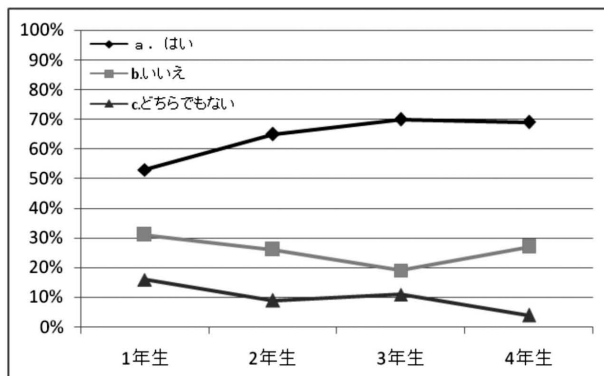


(図6) 検索結果から資料(図書・雑誌・視聴覚)等を探せますか？

5-2) キーワードの使い方について

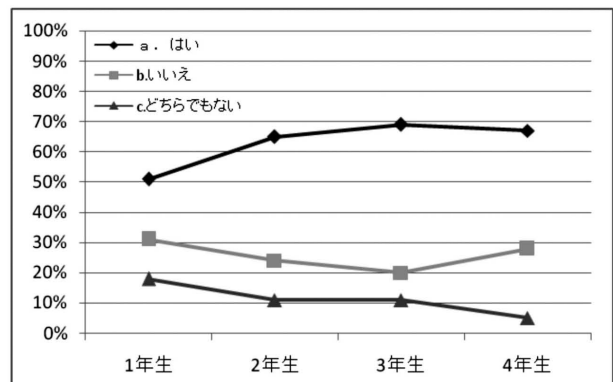
「図書館情報（リテラシー）教育」及び「図書館活用」では必ず蔵書検索を行う前に検索するためのキーワードの抽出方法＝発想法を練習する。学生にとっては無意味なことと感じられるようだが、実際に卒業論文を書くようになったときに初めて理解できるようになる。このキーワードについてもどのような傾向を見せているかをみることにする。

まず、検索の際に必ず検索語として必要となるキーワードをどのように使うかを図7の「キーワードの使い方は理解できましたか？」という質問に対し、50～70%学生が「はい」と回答しておりキーワードの使い方は理解していることがわかる。

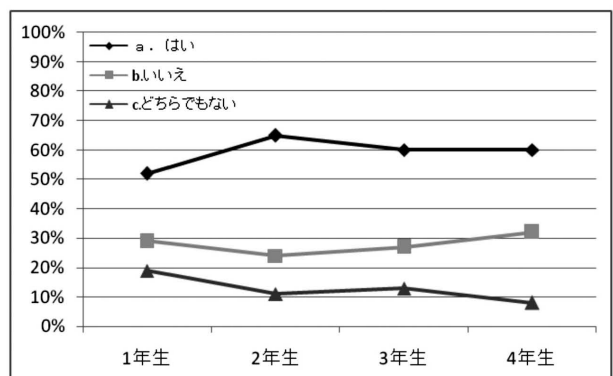


(図7) キーワードの使い方は理解できましたか？

しかし、実際レポートを書いたり論文を書いたりするには課題または自分なりのテーマを持って探すこととなる。講義中には仮のテーマを設定してキーワードを抜きだし演習するが、実際の学習の中でそれがどのように取り入れられているか、「図書館情報（リテラシー）教育」後に検索語としてのキーワードを思いつけるか、図8「自分のテーマからキーワードを思いつけますか？」、図9「テーマに関連するキーワードを連想できますか？」という質問をしてみた。



(図8) 自分のテーマからキーワードを思いつけますか？



(図9) テーマに関連するキーワードを連想できますか？

自分のテーマ（課題）からキーワードを思いつけるかということ及び連想できるかという数字もかなり高い結果が出ている。これは、担当教員とも合わせて卒業論文の際のテーマがぶれることのないように常にキーワードの定着化を行い、それとともに固定概念を避けるために連想キーワードの発想ができることを繰り返し行っているためであると思う。

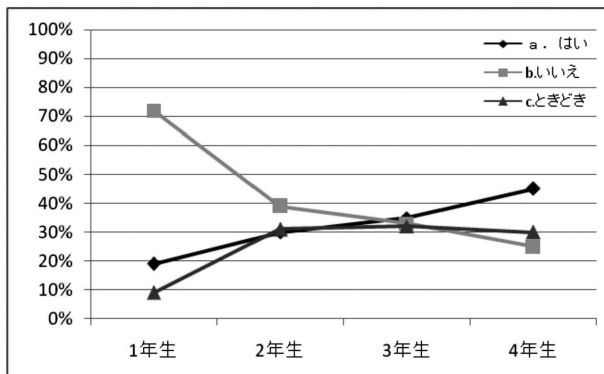
6. 調査結果

6-1) 利用傾向

今回の意識調査は新入生ゼミ（「図書館情報（リテ

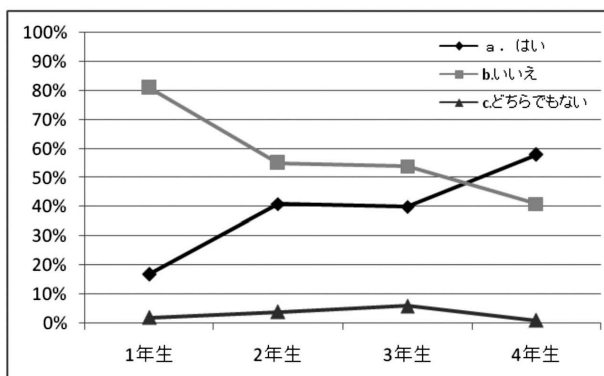
ラシー）教育」）後または演習ゼミ・卒論研究（「図書館活用」）後半以上経った12月に行ったため、自分の学習のために図書館を利用した後のアンケートになる。そのためかなりの実態把握ができるのではないかとみた。

まず、図10「新入生ゼミ(演習ゼミ)を受けたあと図書館を利用していますか？」という質問に対し、1年生では「いいえ」という学生が70%を示しているが、4年生になると「はい」という学生が45%いる。この数字はあまり良い利用傾向とはいえないところがある。



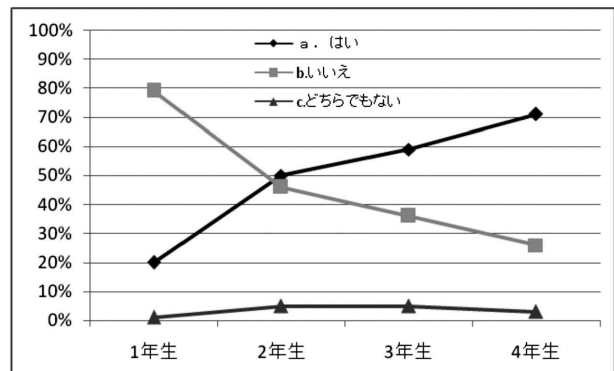
(図10) 新入生ゼミ(演習ゼミ)を受けたあと図書館を利用していますか？

しかし、図11「新入生ゼミ(演習ゼミ)を受けた後図書書を借りましたか？」という質問に対しては、1年生は20%弱の学生が「はい」という回答に対し、4年生には60%近い学生が「はい」と回答している。



(図11) 新入生ゼミ(演習ゼミ)を受けた後図書書を借りましたか？

また、図12「新入生ゼミ(演習ゼミ)のあと図書館で何か調べ物をしましたか？」という質問に対しても図書書を借りた回答とほぼ同様な数字を示している。この傾向は、図書館で何か調べ物をした学生は、図書館の資料を借りて学習する傾向にあることがわかる。

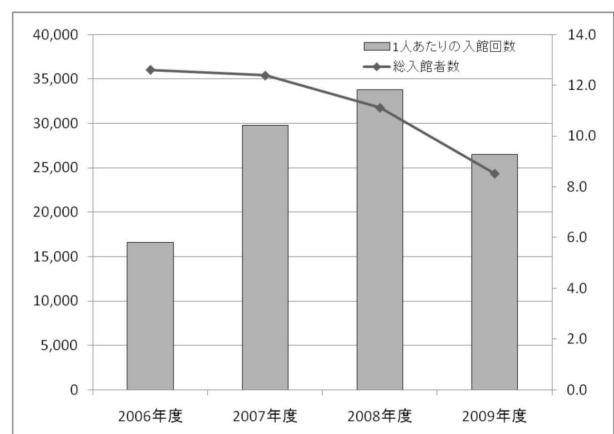


(図12) 新入生ゼミ(演習ゼミ)のあと図書館で何か調べ物をしましたか？

図書館の利用については常に利用しない学生は存在するが、学年が上がるにつれその数字が大幅に減少していることは学生が図書館の利用および必要性を感じているからではないかと考えられる。

6-2) 利用動向について

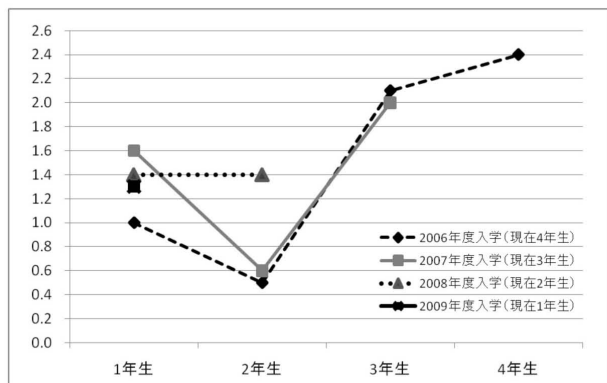
6-1)で学生の意識調査ではかなり良い結果が出たが、実際の動向としてどのような結果が出ているか見る。図書館としてはスポーツ学部開設時から入館者の動向をみているが、全体的な学生数は学部改編などあり減少しているため総入館数は減っている。しかし、1人当たりの入館回数は上がっている。ただし入館者については、スポーツ学部学生の入館回数は抽出できないため図13「総入館者数及び1人あたりの入館回数」のとおり全体の総数でしか見ることはできない。



(図13) 総入館者数及び1人あたりの入館回数

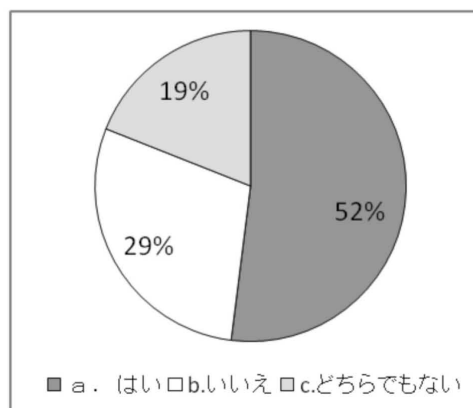
しかし、学生の実質の利用動向は貸出をみることでわかる。図14「スポーツ学部学生の入学時からの貸出動向（1人あたりの貸出冊数推移）」これを新入学生時から4年生までの貸出変遷としてみると、2年生

で一旦貸出は落ちるものの3年生、4年生と貸出冊数が上向きになっているのがわかる。このことから図書館情報（リテラシー）教育は初年度のみでなく継続的に情報検索を伴う講義と連携して実施していくことに効果があるとみてとれる。



(図14) スポーツ学部学生の入学時からの貸出動向
(1人あたりの貸出冊数推移)

また、図16「自分の欲しい文献（紀要・論文）を入手することができますか？」という質問に対し、52%の学生が「はい」と回答している。しかし、入手となると「はい」という数字が検索することとは違い若干数字が下がっている。

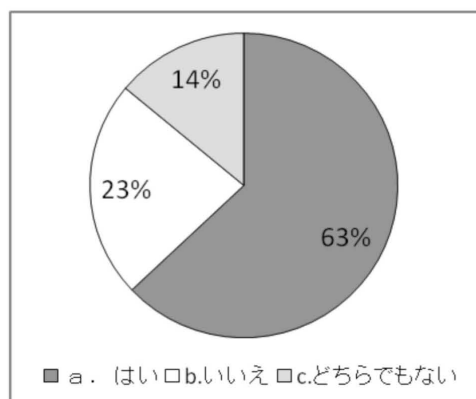


(図16) 自分の欲しい文献(紀要・論文)を入手することができますか？

6-3) 最終学年における利用傾向について

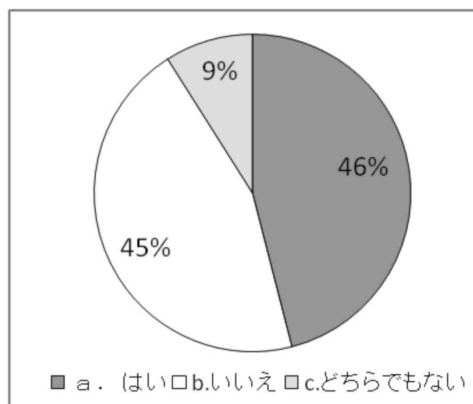
学生の学習傾向の最終地点、卒業論文に向けどのような動向を示し、図書館を利用しているかアンケート調査してみた。

まず文献収集についてみると図15「自分の欲しい文献（紀要・論文）を検索することができますか？」という質問に対し、63%が「はい」という回答をだした。このことは、5.検索について変化のところの数字よりは若干下がるが、実際の文献が必ずしも検索して出てくるわけではないので、このような結果になったのではないと思われる。



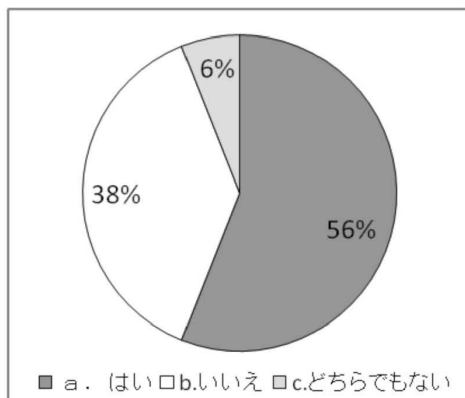
(図15) 自分の欲しい文献(紀要・論文)を検索することができますか？

そこで、本学図書館で文献が入手できない場合はどのようにして学生が文献を入手するか、その方法を知っているかが疑問となった。そこで図17「自分の欲しい文献が図書館にない場合の入手方法を知っていますか？」という質問に対し、「はい」と46%が回答した。2人に1人はいかにして文献を集めて行けばよいかを習得しているということは図書館で行っている「図書館活用」が定着している結果ではないかと考える。



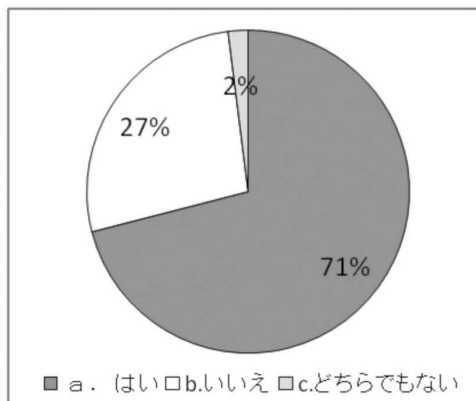
(図17) 自分の欲しい文献が図書館にない場合の入手方法を知っていますか？

また実際に論文を作成するうえでどれだけの学生が、図書館を利用しているか図18「論文・レポートを書くために図書館にある資料を参考にしたことはありますか？」という質問した。その結果、図書館の資料を参考にした学生は56%になった。この数字は「自分の欲しい文献（紀要・論文）を検索することができますか？」という質問と同様の数字から検索した資料は利用されているということがわかる。

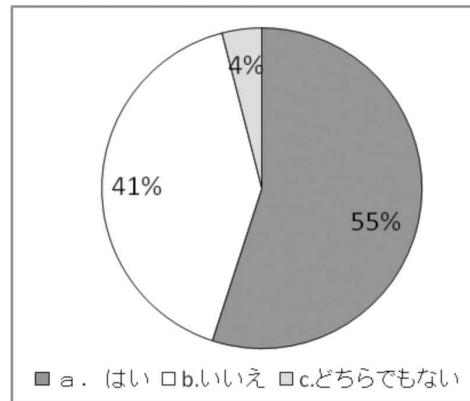


(図18)論文・レポートを書くために図書館にある資料を参考にしたことはありますか？

また実際の卒業論文作成時にはどのように図書館を利用しているかをみると図19「卒業論文を作成するために図書館を利用しましたか？」という質問に対し、71%の学生が「はい」と回答している。あわせて図20「卒業論文構成のため図書館の資料を利用しましたか？」という質問に対しても55%の学生が「はい」と回答している。



(図19)卒業論文を作成するために図書館を利用しましたか？



(図20)卒業論文構成のため図書館の資料を利用しましたか？

これらの結果をみるとやはり新入学生時からの「図書館情報（リテラシー）教育」，「図書館活用」による情報検索などの情報スキルの定着から学生自身の学習の場である図書館を活用していることがわかる。

これらの結果から学習習慣は新入学生時で身につける環境づくりをおこなうことが大切である。今回の調査で「はい」という回答が思いのほか多かった。今後学生が図書館の利用を継続的に持続して促進させるためには教員との連携のもと学生に学習する意欲を持たせることが必要だと思う。また「いいえ」と回答した学生をどのような形で学習意欲を持たせるか課題等を与え、常に情報スキルを継続的に使うようにすることが、不可欠であることがわかった。

7. 今後の課題と展開

2006年度のスポーツ学部開設にあわせ新入学生の学習傾向及び図書館の利用動向などの調査をやってきた。その結果、まず学生に必要なことは学内における学習環境である。図書館はその最たる場所であり、その場所を有効活用できるように教員自身も学生へ働きかけを行わないといけないということがわかった。しかし、それだけではやはり学生が学習をする意欲を高められるわけではない。そこで学習環境の場である図書館の職員の学習支援がなくてはならないものであることがわかる。それは新入学生時から定期的に行う「図書館情報（リテラシー教育）」「図書館活用」は学生にある程度の効果を示しているのは前述の結果で見とれる。

しかし、今後さらに学生の学習意欲を高め図書館の利用をさらに効率よく効果的に使いこなせるスキルを

身につけていくには、今後の教員と図書館職員との連携が大きな鍵となってくるのではないかと考える。

【引用文献】

- 1) 堀内担志, 矢崎美香, 中村絵理 (2009): 図書館情報(リテラシー)教育におけるスポーツ学部学生の利用に伴う動向について(その2) —利用に伴う学習傾向について, 九州共立大学スポーツ学部研究紀要, 3: 29-33
- 2) 堀内担志, 矢崎美香 (2008): 図書館情報(リテラシー)教育におけるスポーツ学部学生の利用に伴う動向について, 九州共立大学スポーツ学部研究紀要, 2: 1-6

【参考文献】

- 平成20年度「学術情報基盤実態調査」の結果報告について
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2009/10/29/1286251_1.pdf
- 瀬戸口誠 (2009): 情報リテラシー教育とは何か: そのアプローチと実践について(<特集>情報リテラシー), 情報の科学と技術, 59(7): 316-321
- 中島玲子 (2009): ユーザ理解のために: 学部生情報検索授業の現場から(<特集>情報リテラシー), 情報の科学と技術, 59(7): 322-327
- 小陳左和子 (2009): NII「学術情報リテラシー教育担当者研修」の取り組み(<特集>情報リテラシー), 情報の科学と技術, 59(7): 348-352
- 伊東泰子(2009): 日本赤十字九州国際看護大学図書館における利用教育について, 看護と情報: 看護図書館協議会会誌, 16: 51-54
- 慈道佐代子 (2008): 一年次教育における図書館の役割 —図書館が参加・実施する情報リテラシー教育を考える, 大学図書館研究, 82: 12-21
- 忽那一代 (2008): 京都大学図書館・除法リテラシー教育の現状 —全学共通科目「情報探索入門」の11年, 図書館雑誌 102(11): 778-780